

紀南地域における人工林伐採跡地の樹木定着量

林業試験場

[研究のねらい]

木材価格の低迷等により、現在人工林伐採後の再生林が困難な状況にあり、未植栽地が見られます。このような林地における森林再生手法を検討するため、紀南地域の人工林伐採後 10 年以上経過した林地（伐採面積 1ha 以上）において、植生調査（胸高直径 $\geq 1\text{cm}$ ）を行いました。

[研究の成果]

- ①調査した 13 林分 29 方形区(100m²/区)内に出現した木本種数は 78 種で、生活形別にみると、高木はシイカシ類・クスノキ科、小高木はツバキ科、低木はクスノキ科・クマツヅラ科が約半数を占めていました。
- ②植生タイプは、先駆種・陽性種型、常緑広葉樹型、針葉樹型の 4 タイプに分類できました(図 1)。先駆種・陽性種型は凹型地形に、常緑広葉樹型は凸型地形に関係して分布しました。将来の林冠を構成すると期待される高木・小高木の種数は、伐採後年数が経つほど増加しました(図 2)。

[成果の活用面・留意点]

人工林伐採跡地の森林整備手法の基礎資料として活用できます。ただし、大型シダ繁茂や食害によると思われる無立木や疎林状態の林地もみられたことから、乾燥立地やシカ密度の高い地域においては、更新を手助けする必要があります。

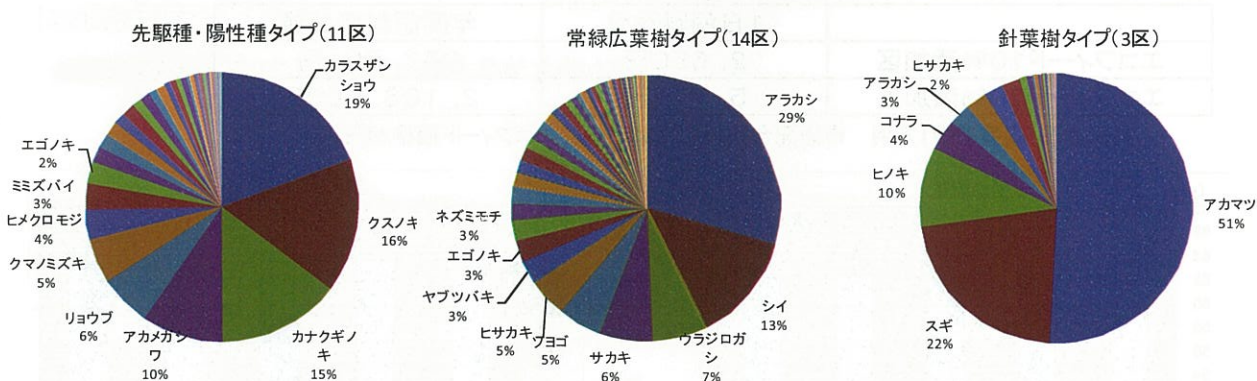


図1 植生タイプ毎にみた樹種別の相対胸高断面積合計の割合

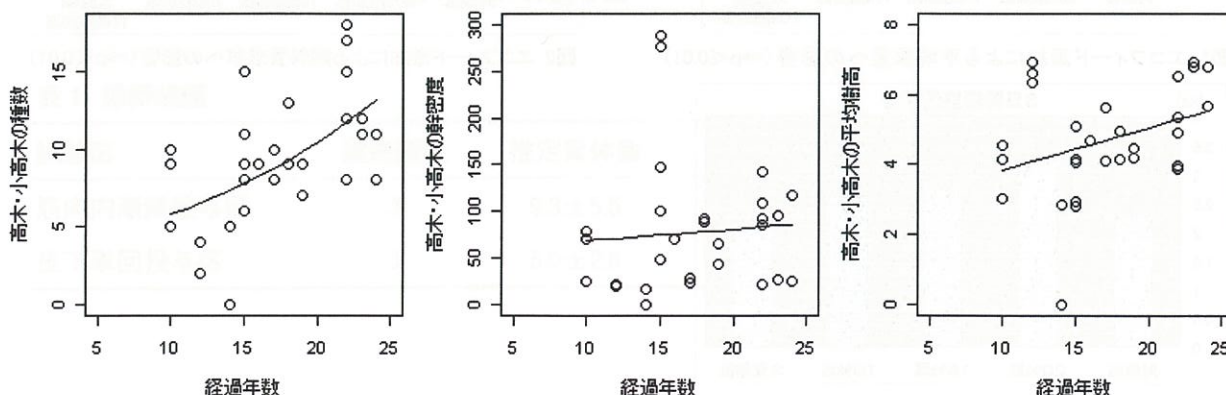


図2 伐採後経過年数と高木・小高木の種数、幹密度(本/100m²)、平均樹高(m)の関係

(問い合わせ先 0739-47-2468)